

学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の実施に係る 京都市地域協議会第7回会議

1 日時

平成 25 年 10 月 29 日（火） 14：00～16：00

2 会場

京都市立桃陽総合支援学校会議室

3 次第

(1) 開会

(2) 議事等

ア 平成 25 年度事業中間報告について

イ 協議，指導助言等①（主に中間報告に関連して）

ウ 「リモート・コンサートホール」システム開発に係るデモンストレーション

エ 協議，指導助言等②（主に最終報告（まとめ）に向けて）

エ その他

(3) 閉会・挨拶

4 参考(配布資料)

- ・「学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の実施に係る京都市地域協議会」第 7 回会議次第
- ・第 7 回会議出席予定者
- ・第 7 回会議座席表
- ・「平成 25 年度フューチャースクール推進事業中間報告書」（平成 25 年 10 月 8 日総務省に提出）
- ・「学びのイノベーション事業（特別支援学校）研究成果報告書（平成 25 年 10 月 2 日文科省に提出）」
- ・第 7 回会議「参考資料」

京都市地域協議会 第7回会議録（概略）

(1) 開会

(2) 議事等

○事務局（学校事務支援室）から配布資料等について説明

- ・10/2 開催の文部科学省ワーキンググループにおける委員等から意見・指摘事項について
- ・本事業の経費等に関して

ア 平成25年度事業中間報告について

○学校事務支援室指導主事から説明

①総務省「中間報告書」に関して

- ・5月28日以降の主な取組について
- ・ICT支援員の活動内容
- ・ICT環境の課題（ネットワーク、アクセスポイント、ICT機器、コンテンツ活用）
- ・事業終了後に向けての課題

○桃陽総合支援学校研究主任から説明

②文部科学省「研究成果報告書」に関して（システム開発を含む）

- ・「リモート・コンサートホール」システムの開発
- ・協働学習ソフトの機能拡充のための研究開発
- ・「リモート・サイエンス・ラボ」システムの活用
- ・他府県支援学校と交流

③文部科学省ワーキンググループにおける委員等から意見・指摘事項について

- ・田村委員「クラウドの活用」
⇒ クラウド版コラボノートの活用
- ・半澤委員「リモート関係のシステムを 朝の会や係活動などで活用」
⇒ 児童生徒会本部会議や分教室集会等で活用
- ・丹羽調査官「本校と分教室で異なる病種間での交流活動は大変」「病種ごとの繋がりに期待」
⇒ 大阪府立羽曳野支援学校や近畿大学附属病院分教室との交流を検討中
- ・アンケートについては本校の現状である，児童生徒の転出入が頻繁にあり，心理的不安定に陥りがちということから，採取数が少ないとともに，回答者の気分で結果が大きく変化するため信頼度が高いとは言えない。

イ 協議，指導助言等①

◆授業記録の採取やウェブ掲載について，教員やICT支援員がどれぐらい関わっているか？

- ・ICT支援員の記録を教育委員会が点検して情報公開している。
- ・教員がICTを活用した授業デザインを作成する段階でICT支援員がかかわっている。

◆ICTを活用した授業の効果や子どもたちの実感はどうか？

- ・観点別の評価が上がってきている。
- ・プリント出力タイプの自主学习ソフトではプリントをファイルにして残している。子どもたちにも取組の成果が分かるため，がんばりにつながっていると思われる。

◆教師の意識変化はどうか？

- ・ICTに対して苦手意識のある教員もあり，ICTを使った授業を強制はしていない。教室にICT機器が常設されているので，自然に活用するようになってきた。

◆アンケートについて、否定的な結果が見られることについては？

- ・現場を見ていない方が数字だけ見るとどうなっているのかと思われるが、子ども個人を見ていれば、否定的な回答をしている子ども問題はない。むしろ、ICTを使う場面と、使わない場面の判断ができてきているのは成長ではないかと考えている。

⇒ 子どものメディアリテラシーが上がっていると思われる。

⇒ 子どもたち自身が ICT 活用に関して厳しく評価している。

⇒ 特別支援教育の柱である個に応じた取組が、ICT を活用することで逆に画一化してしまう弊害があるかもしれない。ICT に対する厳しい評価は子どもたちの要求水準が高くなったこともあるだろうし、子どもの学びが進んだ証拠であり、積極的に良くなった変容であると言える。

◆個に応じた ICT 活用の取組は？

- ・これまでは教材を提示することに力点を置いていたが、前に提示した内容を手元のプリントに写すことができない子どももいる。そういう子に対しては TPC に配信する手法を使うことも始めている。その効果を試している段階である。

- ・手書きよりもパソコンに入力する方がよいという子がいるために、どちらでも選択できるようにしている。提供する教材も紙のものとデジタルのものを用意して、どちらを使っても良いようにしている。

ウ 「リモート・コンサートホール」システム開発に係るデモンストレーション

○本年度の開発方針を説明

- ・病室でも使えるように、より小型化・簡便化を図り、無線 LAN に対応したシステムにする。

○会議室に無線 LAN 接続した RCH 小型版を設置し、音楽室とつないで合奏を行った。

◆振動スピーカーを使用する理由は？ 音質は？

- ・通常のスピーカー音声はマイクが拾いやすくハウリングの原因となるため、これを低減する。
- ・スピーカーにする物体によって音質やクリアさが変わる。

◆ディスプレイがないが、機器の設定などはどうするのか？

- ・ブラウザを使ってアクセスするようになっている。

◆拠点間の音量の調整はどうするのか？

- ・本校に設置された DAW という装置を使って、一元的に調整することになる。

◆病室に置くということについて、何か課題はあるか？

⇒ 振動スピーカーには問題はない。病室に持ち込む場合、機器やコード類の清潔確保をどうするかが問題となると思われる。一つのパッケージにすることも考慮していただきたい。

エ 協議、指導助言等②

○各委員からの御意見

- ・教員が子どもたちに学習内容をより分かりやすく、理解しやすく伝えることに色々工夫をしていることが、ICT 機器の環境を整備したことによって生じた効果を向上させることにも寄与しているのではないだろうか。
- ・子どもたちが、ICT 機器の環境を整備したことでどのように変わったのか。という視点にも注視したい。
- ・今後の教育においては ICT 機器の利用に限らず、世の中にある様々な便利な手段の中から、状況に応じて適切な手段を選択することができる力をつける必要がある。そのような力はすぐにはつかないかもしれないが、そのような視点を子どもたちにしっかりと示すことが必要である。
- ・様々な取組みを行い、またその成果が生まれたのは、ICT 機器の環境を整備したことで実現できたのではなく、人の力（マンパワー）によって実現できたのである。教員の不断の努力はもちろんのこと、ICT 支援員のサポートがなければ今までの取組みを実現することが不可能であ

ることは自明であり、行政の方でもそのような認識を十分に持って欲しい。

- この事業を通じて、ICT 支援員という新しい職種の可能性が見いだせたのではないかと。ICT 支援員がいなければ今回の事業を進めることは困難であったし、ICT 支援員の役割を学校の教員が担うことは困難である。そのため、今後は ICT 支援員を確保するための予算化が必要ではないか。
- 病弱の子どもたちは自己肯定感がとても低いという傾向があるので、子どもたちへのアンケートでは、「在籍期間に頑張ったこと。」「できるようになったこと。」等 ICT には直接関連しないような一般的な項目を設けてはどうか。その回答で積極的で肯定的な意見があれば、その点からも ICT 機器の環境を整備した成果であるといえることもできるのではないかと。
- 教室の中には理解の方法や理解の進度が異なる様々な子どもが在籍しているので、一斉指導の時に教材を提示する時には個別に応じた配慮をするため、視覚からの情報提供だけでなく、聴覚からの情報提供として口頭からの音声情報等も併せて提供することが必要である。そのため作成する教材作りにおいて、今回の ICT 機器が整備されたことで負担が軽減されたということがあれば、ICT の利便性、優位性を示すことができるのではないかと。
- 病院内で行っている実証研究であるので、子どもが主体的になった活動が見えるような実例を医療関係者及び保護者等に提示して、それを積み重ねていくと第三者の意見も得ることができて良いのではないかと。
- 病院に入院している子どもたちは環境が非常に変化してしまっていて、活動に様々な制約を抱えている。そのため、「自己表現」や「人とのつながり」について強い思いがある。ICT 機器等を使って、自分を表現しながら人とつながっていくことで、生きる力を学んでいこうという意欲も高まっていくのではないかと。
- 同じ京都市立学校の病弱教育を担っている学校として、分教室と分教室同士の交流も進めて行きたい。
- 今の取組及び将来につながる取組を考えるならば、今後も人とのつながりを続けながら、子どもたちの心の成長及び子どもたちが望んでいることの実現が可能となるように事業を進めていければよいのではないかと。
- 「ICT 機器があるから、〇〇をしよう。」ということではなく、「この授業で、〇〇のようなことがしたいので ICT 機器がどのように使えるか。」とか、「当初から行う予定の授業の中で ICT をこのように関連付けた。」というように、まず、「授業での目的や概要を定め、その中で ICT 機器の活用を考える。」という考え方が非常に大事なのではないかと。
- 全国にある病弱の特別支援学校や、全国の小児がんの拠点病院などとも連携を密にして、今回の実証実験での成果を共有することが必要ではないかと。
- 今後は、ICT 機器の活用が、「学力向上」ということにつながっていかねばならないと思われるので、ICT 機器が、全国の他の学校ではどのように使われていくべきかということを見視野に入れながら、考察をまとめていく必要があるのではないかと。

(4) 中東校長から閉会の挨拶

「ICT は、学習の機会が非常に制限されている子どもたちにとって、教育を切り拓くツールの一つになるように思います。さらに病弱ではない特別支援学校や小中学校に在籍する支援が必要な子どもにとっても、大きなツールになるように思います。本年度で事業は終了しますが、施設設備だけではなく、教育の中身に関しても教育委員会等の支援を仰ぎながら、本事業の成果を発展させていきたいと考えています。」

第7回会議 参加者

1 地域協議会委員等

(敬称略)

氏名	所属・役職
滝川 国芳	東洋大学文学部教育学科教授【座長】
山村 節子	全国特別支援学校病弱教育校長会副会長，全国病弱虚弱教育研究連盟理事長 (静岡県立天竜総合支援学校長)
桶谷 守	京都教育大学大学院連合教職実践研究科教授 (コミュニティ・スクール研究推進委員長)
黒田 知宏	京都大学医学部附属病院 教授・医療情報企画部長・病院長補佐
神月 紀輔	京都ノートルダム女子大学心理学部准教授
大畑 眞知子	京都市立藤城小学校長 [公務のため欠席]
森本 哲	京都市立松原中学校長 (京都市立中学校教育研究会情報教育部会会長)
竹内 香	京都市立鳴滝総合支援学校長
(氏名 略)	京都市立桃陽総合支援学校保護者代表 (PTA会長)
柴原 弘志	京都市教育委員会指導部長【副座長】 [公務のため欠席]
川井 勝博	京都市教育委員会総務部学校事務支援室長【プロジェクトリーダー】
中東 朋子	京都市立桃陽総合支援学校長

2 校内推進委員会(プロジェクト)

京都市立桃陽総合支援学校教員

京都市教育委員会 総合育成支援課指導主事

京都市教育委員会 総合教育センター指導主事

京都市教育委員会 学校事務支援室指導主事

3 その他

ICT 支援員

西日本電信電話株式会社京都支店

エヌ・ティ・ティ・コム チェオ株式会社

株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェア

株式会社ピーパルシード

4 事務局

京都市教育委員会 学校事務支援室